複数の高齢者施設における高齢者看護学実習の学びの比較
－介護付き有料老人ホームにおける学びの比較－

根本　友子[1)]，菊池　真弓[1)]，山下　知子[1)]
了徳寺大学・健康科学部・看護学科[1)]

要旨

本研究は，複数の高齢者施設における高齢者看護学実習の学生の学びを，最終課題レポートによる内容分析を行い学びを明らかにした．さらに，施設ごとの比較検討をした．コロナ禍によって，施設実習を実践できた介護付き有料老人ホーム2施設による学びの比較である．結果，A施設での学びは3つのカテゴリ，10のサブカテゴリを抽出した。B施設での学びは，3つのカテゴリと8のサブカテゴリ抽出した．共通の学びとして，【高齢者施設の特徴】【高齢者を理解する視点】【生活･療養の場における支援】の３つのカテゴリ，≪癒し・安心な生活の場≫≪多職種連携の重要性≫≪いままでの生活背景≫≪高齢者の尊厳を支える支援≫≪持てる力を支える支援≫等の６つのサブカテゴリを明らかにした．施設ごとによる学びの相違は，≪リスクマネジメント≫≪施設看護師の役割≫等の６つのサブカテゴリであった．以上，高齢者が居る場所や生活の場が異なったとしても，高齢者看護学の必要な基本的要素を学んでいることがわかった．
キーワード：高齢者施設，高齢者看護学実習，看護学生

Comparison of learning in elderly nursing practice in multiple nursing homes
-Comparison of learning in paid nursing homes for the elderly-

Tomoko Nemoto [1)] Mayumi Kikuchi [1)] Tomoko Yamashita [1)]
Ryotokuji University, Faculty of Health Sciences, Department of Nursing [1)]

Abstract

This study is a final task report on the learning of students in nursing practice for the elderly in multiple facilities for the elderly.The content was analyzed by the teacher and the learning was clarified. In addition, a comparative study was conducted for each facility.Comparing learning from two paid nursing homes with long-term care that allowed them to practice institutional trainingbe. As a result, learning at facility A extracted 3 categories and 10 subcategories. At facility BFor learning, 3 categories and 8 subcategories were extracted. As a common learning, [of facilities for the elderlyFeatures] [Viewpoint of understanding the elderly] [Support in the field of life and medical treatment] Three categories, ≪ HealingA place for a safe and secure life ≫ ≪ Importance of multidisciplinary collaboration≫ ≪Background of life ≫ ≪Dignity of the elderlyWe clarified six subcategories such as "Support for Supporting" and "Support for Supporting Power". FacilityThe difference in learning between the two is the six sub-classes such as << risk management >> << role of facility nurse >>It was Tegori. As mentioned above, even if the place where the elderly live and the place of living are different, the nursing practice of the elderlyIt turns out that I am learning the necessary basic elements.

Keywords: nursing home for the elderly, nursing practice for the elderly, nursing students

Ⅰ．研究背景

我が国における人口の高齢化率は著しく，65歳以上人口は，平成30（2018）年3，558万人となり，総人口に占める割合（高齢化率）が28．1％となった．今後，65歳以上の人口は増加傾向が続くものと見込まれている[1)]．高齢者を世帯の種類別にみると，平成７（1995）年の4．2％から22（2012）年は5．7％と高齢者施設への入居が上昇している[2)]．これは，家族構成の変化による介護問題や介護保険制度（2000年）による介護サービスへの関心や理解の深まりにより，高齢者が安心して生活するために高齢者施設の利用が増えている現状がある．高齢者施設には，高齢者の要介護者や自立に向けた，公的施設の特別養護老人ホームや介護老人保健施設・軽費老人ホームから，民間施設の住宅型有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅等さまざまな種類がある．このような，我が国の現状から看護専門職者は高齢者を理解すると共に，さまざまな高齢者施設での看護の役割が拡大となり，重要な役割を担う必要性がある．

高齢者看護学実習では，高齢者の理解と共に看護の役割を学ぶだけではなく，さまざまな高齢者施設の特徴を理解し，保健医療福祉における多職種連携を学ぶことで，幅広い領域で人々の健康と福祉の向上に貢献できる専門性をもった看護職専門職者の育成に繋がり重要である．

本学の高齢者看護学実習Ⅱは，介護老人福祉施設と介護老人保健施設，有料老人ホームの高齢者施設で実習を行い，施設の特徴を踏まえ高齢者の理解と看護を学ぶ目標としている．しかし，さまざまな高齢施設を実習することで，学生の学びに差が生じている可能性もある．先行研究では，介護老人福祉施設と介護老人保健施設の学びの比較で「生活史・体験世界からの老年期の理解」「コミュニケーションを築いていく際の技術」「エンパワーメントを促進する援助の理解」等，6カテゴリが共通していた．そして，福祉施設では「施設ケアにおける他職種との連携の意義・必要性」，老健施設では「維持期リハビリテーション実践の技術」「ヘルスアセスメントに求められる技術」を施設特有の学びとして明らかにしている[3)]．しかし，介護老人福祉施設と介護老人保健施設の学びを比較した研究のみで，近年の研究も見当たらなかった．本研究は，高齢者看護学実習Ⅱの学生の最終課題レポートに記述された内容を分析することにより，学びを明らかにし施設ごとに比較検討していく．高齢者看護学Ⅱの実習を通して，学生がさまざまな高齢者施設の特徴を踏まえ，高齢者を理解すると共に看護の学びを深めるために重要な研究である．

昨年度は，コロナ禍によって臨地実習の制限があり，予定していた複数高齢者施設での実習が実践できなかった．そのため，本研究は施設実習が実践できた介護付き有料老人ホーム，2施設による学びの比較である．

Ⅱ．研究目的

本研究は，高齢者看護学実習Ⅱのさまざまな高齢者施設の学生の学びを明らかにする，さらに各施設の学生の学びを比較検討することが目的である．

Ⅲ．高齢者看護学実習Ⅱの概要

１．実習目的

加齢に伴う変化や健康障害による，施設で生活する高齢者とその家族の特徴を理解し，より良い生活支援のために必要な知識・技術・態度を修得する．

２．実習単位・時間：2単位　90時間　2週間

３．実習スケジュール（表1）

表1　高齢者看護学実習Ⅱ　実習スケジュール

	月	火	水	木	金
第１週	<学内学習> オリエンテーション 事前学習	施設オリエンテーション 情報収集 学生カンファレンス、記録の整理	施設実習 情報の明確化 学生カンファレンス、記録の整理	施設実習 アセスメント カンファレンス 看護の方向性について意見交換	<学内実習> 問題抽出 計画立案
第２週	施設実習 関連図/計画発表 学生カンファレンス、記録の整理	施設実習 関連図/計画発表 学生カンファレンス、記録の整理	施設実習 計画実施 学生カンファレンス、記録の整理	施設実習 計画実施 学生カンファレンス、記録の整理	<学内学習> 計画評価 記録のまとめ 学びのまとめ 自己評価 記録提出 16 時

４．実習施設の概要（表2）

表2　実習施設の概要

１）A 施設	（１）入居者の平均年齢：86.8 歳 （２）特に多い介護度：要支援 1～要介護 2 （３）入居者数：94 名 （４）総職員数：54 名（内看護師 4 名）
２）B 施設	（１）入居者の平均年齢：87.5 歳 （２）特に多い介護度：要支援 2～要介護 4 （３）入居者数：104 名 （３）総職員数：73 名（内看護師 5 名）

Ⅳ．研究方法

１．研究デザイン：質的記述的研究

２．研究対象者：研究対象者は，A大学看護学科3年次の領域別実習・高齢者看護学実習Ⅱで，施設実習を履修できた16名の学生とした（内訳A施設：8名，B施設：8名）.

３．調査期間：2020年11月～2021年3月

４．分析方法

１）データは，実習終了後の課題レポートを分析対象とした.

２）実習終了後の課題レポートから，質的記述的方法により学びの内容分析を行った.

記述の内容から，「・・・学んだ」「・・・わかった」「・・・感じた」「・・・思った」などの言葉を，学びの内容の表現と捉え抽出する。抽出した学びの内容を詳細に読み，その意味が変化しないように，また記述されている語録を残すように忠実に要約し，それぞれをコード化する．学びの内容は，意味内容の類似性に従い分類し，サブカテゴリ，カテゴリへと抽象度を高め，その内容を表すようなカテゴリ名を命名した．信頼性・妥当性を高めるために，共同研究者間で内容の検討を行った.

Ⅴ．倫理的配慮

本研究は，了徳寺大学生命倫理委員会の承認を経て行った（20 - 22）．研究対象者には，本研究の目的及び意義，研究方法，研究への協力は自由意思であること，同意した後も随時これを撤回できる自由意思に基づく研究であること，協力をしない場合でも一切の不利益はないこと，高齢者看護学実習Ⅱの評価には影響しないことを説明した．さらに，学生の最終課題レポートは，個人が特定できないように匿名化をはかり，氏名の記載を消去したものをコピーし使用した，プライバシーの保護と守秘義務について説明をした．本研究で得られたデータは，本研究以外に使用しないこと，研究の成果を論文投稿にて公表することを説明した．以上，説明と同意を得た．さらに，同様の内容をポスターに記載し掲示をした.

Ⅵ．結果

介護付き有料老人ホームAとBの2施設で実習を行った，16名の学生の最終課題レポートの内容を分析した．その結果，A施設での学びは3つのカテゴリ，10のサブカテゴリ，40のコードを抽出した。B施設での学びは，3つのカテゴリと8のサブカテゴリ，40のコードを抽出した．以下，カテゴリを【】，サブカテゴリを≪≫を用いて示す.

１．A施設の学び（表3　A施設の学生の学び）

【高齢者施設の特徴】では，≪安心な生活の場≫≪周囲への気遣い≫≪多職種連携の重要性≫の3つのサブカテゴリを抽出した。【高齢者を理解する視点】では，≪加齢変化と疾病の共存≫≪いままでの生活背≫の2つを抽出した．【生活・療養の場における支援】では，≪ひとりひとりの価値観≫≪コミュニケーションから強みを見出す≫≪高齢者の尊厳を支える支援≫≪持てる力を支える支援≫≪リスクマネジメント≫の5つのサブカテゴリを抽出した.

２．B施設の学び（表4　B施設の学生の学び）

【高齢者施設の特徴】では，≪癒しの生活の場≫≪多職種連携の重要性≫の2つを抽出した。【高齢者を理解する視点】では,≪加齢変化と疾病の比較≫≪今までの生活背景≫の2つを抽出した．【生活・療養の場における支援】では，≪施設看護師の役割≫≪非言語的コミュニケーションによる信頼関係

≫≪高齢者の尊厳を支える支援≫≪持てる力を支える支援≫の４つのサブカテゴリを抽出した.

３．施設ごとの学びの共通と相違サブカテゴリ（図１施設ごとの学びの共通と相違サブカテゴリ）

施設ごとの学びの共通は,【高齢者施設の特徴】の≪癒し・安心な生活の場≫≪多職　種連携の重要性≫,【高齢者を理解する視点】の≪加齢変化と疾病の共存･比較≫≪い　ままでの生活背景≫,【生活・療養の場における支援】の≪高齢者の尊厳を支える支援　≫≪持てる力を支える支援≫, ６つのサブカテゴリであった.

施設ごとの相違は, A施設では【高齢施設の特徴】の≪周囲への気遣い≫,【高齢者を理解する視点】の≪一人一人の価値観≫≪コミュニケーションから強みを見出す≫,【生活・療養の場における支援】の≪リスクマネジメント≫, B施設の学びでは【生活・療養の場における支援】の≪施設看護師の役割≫≪非言語的コミュニケーションによる信頼関係構築≫, ６つのサブカテゴリであった.

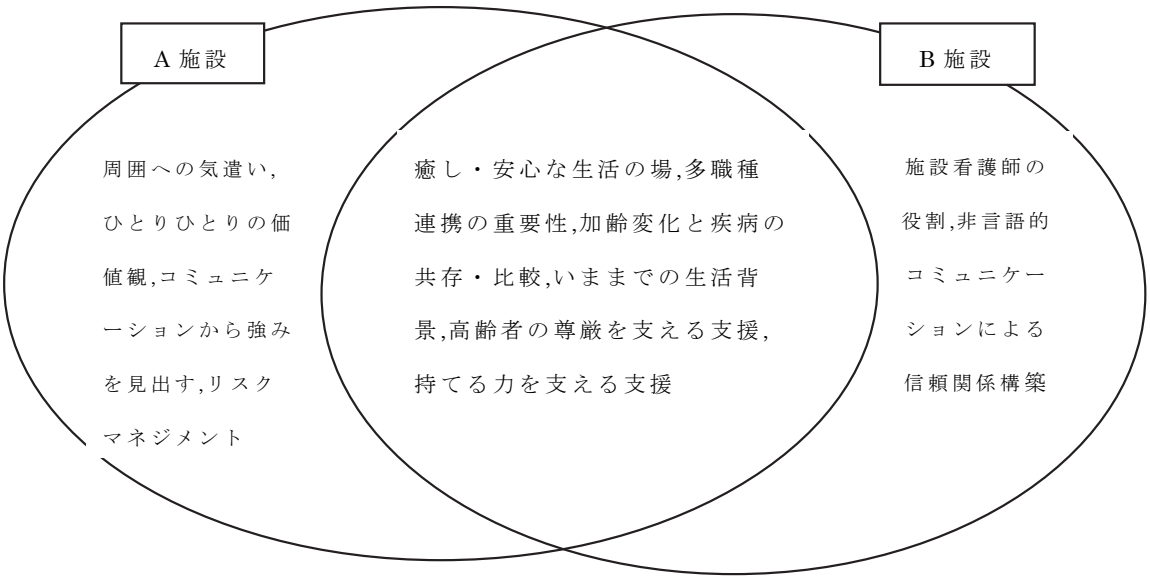
表３　A施設の学生の学び

高齢者施設の特徴	安心な生活の場	施設は、利用者と家族にとって生活への支援があり安心できる場である
		施設は生活の場所であるため、利用者の生活スタイルを変えずにどうしたら居心地よく暮らしていけるか、安心安全に生活ができるかを考え関わっていく
	周囲への気遣い	利用者の性格は様々であり、スタッフに気を使うなど何らかの理由で介助を求めない方も多い
		施設は、利用者の生活の場であるが常に観察されていると居心地が悪い
	多職種連携の重要性	高齢者であることから、加齢に伴う変化が著明に現れるため、多職種で連携をし利用者の変化を共有することで、利用者の観察ポイントや留意点が見えてくる
高齢者を理解する視点	加齢変化と疾病の共存	高齢者は病気や障害と共に生活することが特徴である
		加齢による身体変化と長期の生活習慣により、罹患する疾患も多く重篤な疾患につながる
		高齢者は、疾患と加齢変化の側面から状況を理解することが大切である
	いままでの生活背景	利用者の生活背景を含め身体的、精神的、社会的な側面からとらえて関わる
		利用者の今までの生活様式・生活習慣、生活歴を知ることはとても重要
		楽しみややりたいことがあるかは、利用者にとって大切で健康へとつながる一つである
		好きなことを生活に取り入れることは、利用者の表情が明かるくなり活動意欲が高まることでADLの向上が図れる
生活・療養の場における支援	ひとりひとりの価値観	利用者のニーズに合わせつつ、生活リズムを調整していくことが必要
		利用者の生活背景を考え、どのような生活を望んでいるのかを理解する
		利用者の普段の様子を観察し、何で困っているか主観的と客観的観察から理解する
	コミュニケーションから強みを見出す	利用者へケアへの参加を促す時は、参加しやすいような言葉を選択する工夫が必要である
		利用者とコミュニケーションを取りながら強みを把握する
		利用者がどのような生活を望んでいるのか、普段の会話に中から見つけて支援をする
	高齢者の尊厳を支える支援	生活歴や性格、思考などから強みを見つけ、その強みを生かしながら自尊心を損なわないような態度で援助を行う
		利用者が体調が優れないときは無理にするのではなく、本人の意向を尊重する
		利用者さんの意向を組み込み継続していくことが必要がある
		一人ひとりの個別性にあった援助を行い、その人らしく日常生活を送ることができるよう信頼関係を築いていく
		日々の観察力を大切に、利用者さんの立場にたって援助することが大切
	持てる力を支える支援	疾患の治癒を目指すのでではなく、病気との共存、身体能力の維持、予防的対処を優先する必要がある
		疾患の治癒を目指すのではなく、既往歴を抱えながら生活するために必要な介護を受け、身体能力の維持やADL/QOLを低下させないよう予防的援助が必要である
		高齢者看護は、日常生活動作のサポートや健康管理が重要である
		高齢者は、疾患からの症状を理解しケアにつなげていく
		様々な疾患があるからできないなど決めつけず、関わっていく中で生活上の課題を見つけることが大切
		利用者が、迷惑をかけたくないという思いから、コールを押さないことにより転倒のリスクが高まる
		利用者が、介助を求めやすいような関係性を気付くことやいつでも呼んで欲しいということを伝えるこは、危険時のコールにつながり転倒の防止になる
		車椅子移乗移動、ブレーキのかけ忘れによる転落リスクから利用者の主体性・自律性を意識した声かけが重要である
		生活する上でどのような課題があるのか観察し、援助を行うことで転倒のリスクを軽減することができ、ADL/QOLを低下させないよう努めることができる
		下肢の浮腫と認知症にて転倒リスクがるため、足浴を行ったことはQOLの維持・向上につなげられた
		すべてやってあげるのではなく、できることは自分でしてもらうことで認知機能の低下や残存機能の維持になる
		日々関りながら、少しずつ出来ることを増やしていくことで機能を維持出来るような援助を行う
	リスクマネジメント	右膝に体重をかけるとふらつくことが多く転倒の可能性が高い
		膝痛時は、車椅子を使うこともあり活動と休息バランスが大切である
		利用者が日中ぼーっとしていることが多く、他者との交流も少ないため活動性が低下している
		パーキンソン病による姿勢保持障害や白内障で視力が低下しているため活動性が低下している
		何度も転倒と骨折を繰り返し、転倒のリスクが高い

表４　B施設の学生の学び

高齢者施設の理解	癒しの生活の場	安全・安楽に配慮した癒しの生活の場である
		家であり癒しの場である
		病院とは違い、生活の場であり一生を過ごす場所である
	多職種連携の重要性	多職種間で、利用者の性格や個別性の情報共有して理解する
		利用者を全体的・継続的に理解するには多職種間の情報共有が重要である
		多職種で利用者の個別性を理解するには、情報共有、知識の提供が必要である
		利用者の個別性を尊重した上で、安全・安楽とは何か、多職種と考えていく姿勢が重要である
		専門職同士が同等な立場で意見交換することで、継続的な医療が行える
		介護職の仕事は、日常生活のサポートである
高齢者を理解する視点	加齢変化と疾病の比較	高齢者の身体的・精神的・社会的特徴を踏まえ、現在の状況と疾患などと比較する
	いままでの生活背景	利用者のキャラクター、入居前の生活を知ることは大切である
		生活の場において利用者の背景まで考える
		利用者のニーズや性格、生活背景、家族の心情などを考える
生活・療養の場における支援	施設看護師の役割	入居している高齢者の健康管理や薬の管理行っている
		様々な職種と情報の共有、知識の共有を行い連携し、高齢者の生活を支える支援をする
		利用者が現在どのような状況、どのようなことが必要なのか、どこを予防していくのか、どのようなことを配慮するのか、医療と日常生活の側面から多職種と情報共有し、生活支援から看取りまで行う
		異常の早期発見、多職種連携しながら、健康状態を維持することや家族への支援していく
		常に多職種と連携し、その人らしく生活を送るため、家族のニーズを実現させるために、介護度や疾患が悪化しないように看護支援している
		その人が満足して生活し最期が迎えられるよう調整している
		医療や看護の立場でサポートしていくこと、健康管理がメインである
		利用者の健康管理・薬剤管理である
		介護職や医師との多職種連携を行うことが重要である
	非言語的コミュニケーションによる信頼関係の構築	利用者の言葉だけではなく表情や態度から訴えようとしていることを理解する
		利用者の性格や特徴などを捉え、その人の合わせた方法で接する
		不穏状態が強い利用者との関わりで、手を握る、共感することで安心感が得られた
		利用者からのサインは、必ず受け止め、自分は味方であるということを理解してもらう
		利用者が自分は味方であるということを理解してもらうことは、信頼関係が築け最善のケアができる
		傾聴や見守りが重要な看護である
		日々の利用者さんの様子から言葉を選択して関わる
		利用者との会話で、興味が沸いたものを一緒に行うという関りは利用者の喜びに繋がる
		利用者の思い・意向をくみ取ることは、信頼関係につながる
	高齢者の尊厳を支える支援	利用者の羞恥心に配慮し、丁寧なケアは精神的な苦痛が軽減されていく
		利用者の生活背景や先輩であることから、一人ひとり敬う気持ち、自尊心を傷つけない声掛け・ケアが大切である
		疾患を治すことが目的ではなく、暮らして行く中でニーズを尊重し満足感を得てもらう
		利用者が望んでいるのは何か、癒しとは何かを考える
		利用者の意思を尊重し、残存機能に働きかけながら、その人らしい生活が送れるように関わる
		利用者自身の役割・機能を把握し関わることで、自己肯定感につながりQOLに影響する
		利用者を生活の視点で考えられる
		加齢や疾患による身体的状況はもちろんのこと「対象者の人となり」を捉える
		生活の場であるため疾患より生活上の課題に対して重きをおく
	持てる力を支える支援	利用者が転倒転落を起こさないように支援することが、その利用者の生活を守ることにつながると感じた
		利用者の活動と休息のバランスを整えることが重要である
		高齢者において残された力、持てる力に注目することが重要で、利用者の残存機能を活かすことでADLの維持に繋がる

図１　施設ごとの学びの共通と相違サブカテゴリ



Ⅶ. 考察

１．高齢者看護学実習の学び

介護付き有料老人ホームは，24時間介護スタッフが常駐し，身の回りの世話や介護サービスが受けられる施設となっている．学生は，【高齢者施設の特徴】を≪安心な生活の場≫≪癒しの生活の場≫捉えている反面，共同生活における支障として≪周囲への気遣い≫があるのではないかと学んでいた．そして，≪多職種連携の重要性≫により高齢者と家族の多様なニーズに答えるには，異なる専門性をもつ多くの職種とチームを組むことが不可欠であると理解を深めたと考える．

高齢者は，さまざまな疾患を抱えて生活していることや，いままでの生活背景や生活スタイル，個々の価値観によって，身体的・精神的・社会的側面に個別性が生じてくる．【高齢者を理解する視点】として≪加齢変化と疾病との比較≫≪加齢変化との共存≫という視点で捉えること，また≪いままでの生活背景≫として，今までの生きてきた過程を含めた理解をすることの重要性を学んでいた．高齢者を理解するには，疾病だけを看るのではなく，加齢変化と個々の生活背景を看て，「その人を捉える」ことの理解を深めたことになったと考える．また，高齢者の生活史を十分にアセスメントし，できるだけ生活史の延長で必要なケアが提供できるように支援することが重要である[4)]．このことから，その基礎となる学びが得られていると考える．

高齢者看護の目標は，高齢者がもつ健康あるいは生活上のリスクの最小化と，可能性の最大化をはかる援助を通して，その人の望む自律的な生き方と安らかな死に貢献することである[5)]．【生活・療養の場における支援】では，≪ひとりひとりの価値観≫を大切にして，≪高齢者の尊厳を支える支援≫や≪非言語的コミュニケーションにおける信頼関係を構築≫し，≪コミュニケーションから強みを見出す≫ことになることを学んでいた．学生は，高齢者と向き合い，高齢者の語りに耳を傾けながら理解を深めていたと考える．しかし，高齢者は認知症などにより言語的コミュニケーションが図りにくくなっている場合が多い．また，世代の違う高齢者とのコミュニケーションに戸惑うこともあったと推測できる．その戸惑いを起点に，学生はどのように高齢者とコミュニケーションを工夫すればいいのかを学んだと言える．また，いま

までの生活背景を理解するプロセスにおいて，高齢者の心の奥に潜む言葉や語りに耳を傾け，高齢者の生活背景や価値観など，高齢者の「その人らしさ」を発見できる学びとなっていたと考える。志村[6]は，「人生の語りを聴くにおいて，話し手と聞き手の関係性が非常に重要であり，他の誰でもないその聞き手がそばにいるからこそ，思い出す出来事，語られることがある」と述べている．これらの学びを通して，高齢者の ≪持てる力を支える支援≫となり，≪リスクマネジメント≫のアセスメントの重要性学ぶことへ繋がっていると考える．

福祉施設における体制の中で，利用者への生活を支援しているのは介護職が中心であり，看護師は健康管理を中心に業務についている。そのため，学生が直接看護師と関わる機会は少ない．その中で，オリエンテーション時に看護師から直接，施設看護師の役割について話を聞いたり，看護師の申し送りを見学参加したり，回診の準備や診察の見学・介助を行い，施設看護師の役割について学びを得ている．今回，B施設の学生の学びで【施設看護師の役割】が明らかとなった．これは，利用者の介護度が高いことで医療処置を必要としていることが多かったことが影響していたのではないかと考える．桑田[7]は，介護保険施設で求められる看護は，健康管理，高齢者の意思の尊重，介護職との連携・協働，安全に配慮した環境づくりとされている．施設看護師の役割は，A施設の学生の学びから十分に施設看護師の役割を学ぶ内容であったと考える．

２．施設ごとの学びの比較

実習施設が，2施設とも介護付き有料老人ホームであったことで共通する学びは，【高齢者施設の特徴】が概ね共通する学びであったと考える．また，【高齢者を理解する視点】においても高齢者看護の基礎となる学びを得られていると言える．２施設の学びの相違は，利用者の介護度や医療処置を多く必要としているかによる施設の違いが影響したと考える．そのことで，利用者からの学びと共に学生と関わる機会が多かった専門職者からの学びが，サブカテゴリで抽出された≪施設看護師の役割≫≪リスクマネジメント≫等の施設ごとの学びの相違になったと推測する．

以上，高齢者看護学実習の学びの内容を概観し，同じ種類の2施設での実習を行い，多くの共通性があるものの相違点もわかった．特に，≪癒し・安心な生活の場≫≪多職種連携の重要性≫≪いままでの生活背景≫≪高齢者の尊厳を支える支援≫≪持てる力を支える支援≫で表現される内容は，高齢者が居る場所や生活の場が異なったとしても，高齢者看護学の必要な基本的要素を学んでいることがわかった．

Ⅷ．結論

本研究では，A施設での学びは3つのカテゴリ，10のサブカテゴリを抽出した。B施設での学びは，3つのカテゴリと8のサブカテゴリ抽出した．共通の学びとして，【高齢者施設の特徴】【高齢者を理解する視点】【生活・療養の場における支援】の３つのカテゴリ，≪癒し・安心な生活の場≫≪多職種連携の重要性≫≪いままでの生活背景≫≪高齢者の尊厳を支える支援≫≪持てる力を支える支援≫等の６つのサブカテゴリを明らかにした．施設ごとによる学びの相違は，≪リスクマネジメント≫≪施設看護師の役割≫等の６つのサブカテゴリであった．

Ⅸ．本研究の限界と今後の課題

本研究では，介護付き有料老人ホームでの学生の学びを明らかにし，学びの比較を検討することができ

た．しかし，介護付き有料老人ホームの2施設だけであったため，今後は，さらに，さまざまな施設の特徴を踏まえた学生の学びを比較検討していくことが課題である．このことにより，高齢者施設における学習内容の精選，指導内容の明確化につながり，学生の学びをより深めることができる．

本研究は，利益相反は存在しない．

引用・参考文献

１）内閣府（2019）：高齢社会白書
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html（2021.10.28 21:00アクセス）

２）総務省統計局（2012）統計からみた我が国の高齢者（65歳以上）.統計トピックスNo.63.
https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1260.html（2021．10.28　20：00アクセス）

３）加藤真紀・梶谷みゆき（2006）老年看護実習における学生の学びと指導上の課題の検討，島根県立看護短期大学紀要.第12巻.79-90.

４）奥野茂代（2006）老年看護学Ⅰ老年看護学（第3版），91，153-154，ヌーヴェルヒロカワ，東京.

５）北川公子（2021）系統看護学講座 専門分野Ⅱ老年看護学，73，医学書院，東京.

６）志村ゆず（2005）ライフレビューブック ‐ 高齢者の語りの本づくり-（初版）.62，弘文堂，東京.

７）桑田美代子（2021）系統看護学講座 専門分野Ⅱ老年看護学，367 ‐ 368，医学書院，東京.

８）住吉和子，岡野初枝（1999）老年看護学実習での学生の学び―実習施設による学びの違いー，岡山大学医学部保健学科紀要.10:35-49.

９）千葉真弓，原田美香ほか（2008）介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び，長野県看護大学紀要.10:21-32.

10）小林紀明，杉山洋介，黒臼恵子，堤千鶴（2009）複数の保険・福祉施設における老年看護学実習の学習効果，目白大学健康科学研究紀要，第2号65 ‐ 72.

11）杉野朋子，丹羽さよ子（2011）老年看護学実習における学びの分析，鹿児島大学医学部保健学科紀要.21:13-19.

12）石垣範子，深江久代，今福恵子，宮前典子（2012）介護老人保健施設での老年看護学実習における学生の困難感について，静岡県立大学短期大学部研究紀要.第26号 43-55.

13）藤谷未来（2020）老年看護学実習における学生の気づきを引き出す指導に関する ‐ 考察 ‐ 学生が気付いた生活史を通して高齢者を尊重するということ ‐，日本赤十字北海道看護大学紀要，第20巻，1 ‐ 9

2021年12月3日　受理

了徳寺大学研究紀要　第16号